

日本青春文学名作選 24

定 価 2 6 0 円

・ 昭和40年 7 月10日 初 版 発 行
昭和40年 7 月 1 日 印 刷

編 者 学習研究社書籍編集部
発 行 者 古 岡 秀 人
印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 会 社

株式会社 学 習 研 究 社

東京都大田区上池上町264

電 話 東 京 (720) 1 1 1 1

振 替 東 京 1 4 2 9 3 0

G 64124 © 1965 学習研究社

目 次

解説 福田 清 人
日沼倫太郎

3 野 分

141 ヴィヨンの妻

179 美しい女



一

白井道也は文学者である。

八年前大学を卒業してから田舎の中学を二、三か所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へもどつてきた。流すとは門付に用いる言葉で飄然とは徂徠にこだわらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受け合はぬ。もつれたる糸の片端も目を着すればただ一筋の末とあらわるるにすぎぬ。ただ一筋の出処の裏には十重二十重の因縁がからんでいるかもしれぬ。鴻雁の北に去りて乙鳥の南にくるさえ、鳥の身になつては相当の弁解があるはずじや。

始めて赴任したのは越後のどこかであつた。越後は石油の名所である。学校のある町を四、五町隔てて大きな石油会社があつた。学校のある町の繁栄は三分二

以上この会社のおかげで維持されている。町のものにとつては幾個の中学校よりもこの石油会社のほうがはるかにありがたい。会社の役員は金のある点において紳士である。中学の教師は貧乏なところが下等に見える。この下等な教師と金のある紳士が衝突すれば勝敗はだれが目にも明らかである。道也はあるときの演説会で、金力と品性という題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員等の暴慢と、青年子弟の何等の定見もなくしていたずらに黄白万能主義を信奉するの弊とをいましめた。

役員等は生意氣なやつだと言つた。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐くと評した。彼の同僚すらよけいなことをして学校の位地を危うくするのは愚だと思つた。校長は町と会社との関係を説いて、みだりに平地に風波を起こすのは得策でないと説諭した。道也の最後に望みを属していた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほどを知らぬばか教師と言いだした。道也は飄然として越後を去つた。

次に渡つたのは九州である。九州を中断してその北

部から工業を除けば九州は白紙となる。炭鉱のけむりを浴びて、黒い呼吸をせぬ者は人間の資格はない。あか光りのする背広の上へ青い顔を出して、世の中がこゝろの、社会がああ、未来の国民がなんのかのと白銅一個にさえ換算のできぬ不生産的な言説を弄するものに存在の権利のあらうはずがない。権利のないものに存在を許すのは実業家のお慈悲である。むだ口をたたく学者や、蓄音機の代理をする教師が露命をつなぐ月幾片の紙幣は、どこからわいてくる。手の掌をぼんとたたけば、おのずから降る幾億の富の、ちりのちりの末をなめさして、生かしておくのが学者である、文士である、さては教師である。

金の力で生きておりながら、金をそしるのは、生んでもらった親に悪体をつくと同じことである。その金を作ってくれる実業家を軽んずるなら食わずに死んでみるがいい。死ねるか、死に切れずに降参をするか、ためしてみようと言ってほうり出されたとき、道也はまた飄然と九州を去った。

第三に出現したのは中国辺の田舎である。ここの気

風はさほどに猛烈な現金主義ではなかった。ただ土着のものがむやみに幅をきかして、他県のものを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手をまわしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であてこする。それから新聞でいや味を並べる。生徒にからかわせる。そうしてそれがなんのためでもない。ただ他県のものが自分と同化せぬのが気にかかるからである。同化は社会の要素に違いない。仏蘭西のタルドと言う学者は社会は模倣なりとさえ言うたくらいだ。同化はたいせつかもしれぬ。そのたいせつさかげんは道也といえども心得ている。心得ているところではない、高等な教育を受けて、広義な社会観を有している彼は、凡俗以上に同化の功德を認めている。ただ高いものに同化するか低いものに同化するかが問題である。この問題を解釈しないでいたずらに同化するのは世のためにならぬ。自分から言えば一分が立たぬ。

あるとき旧藩主が学校を参観にきた。旧藩主は殿様

で華族様である。所のものから言えば神様である。この神様が道也の教室へはいつてきたとき、道也は別に意にもとめず授業を継続していた。神様のほうではむろんあいさつもしなかった。これからことがむずかしくなった。教場は神聖である。教師が教壇に立って業を授けるのは侍が物の具に身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張であった。この主張のために道也はまた飄然として任地を去った。去るときに土地のものは彼を目して頑愚だと評し合うたそうである。頑愚と言われたる道也はこの嘲罵を背に受けながら飄然として去った。

三たび飄然と中学を去った道也は飄然と東京へもどつたなり再び動く景色がない。東京は日本でいちばんせちがらい所である。田舎にいるほどの俸給を受けてさえ楽には暮らせない。まして教職をなげうって両手をたもとへ入れたままでやり切るのは、立ちながらみいらとなる工夫と評するよりほかにほめようのない方法である。

道也には妻がある。妻と名がつく以上は養うべき義務は付随してくる。みずからみいらとなるのを甘んじても妻を干乾にするわけには行かぬ。干乾にならぬよほど前から妻君はすでに不平である。

始めて越後を去るときには妻君に一部始終を話した。そのとき妻君はごもつともでござんすと言って、かいがいしく荷物の手ごしらえを始めた。九州を去るときにもその顛末を言つて聞かせた。今度はまたですかと言つたぎり何にも口を開かなかった。中国を出るときに妻君の言葉は、あなたのように頑固ではどこへいらしつても落ち着けつこありませんわと言う訓戒的のあいさつに変化していた。七年の間に三たび漂泊して、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍を遠のくようになった。

妻君が自分の傍を遠のくのは漂泊のためであろうか、俸禄を棄てるためであろうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がつたらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉をもらしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に

転任してもやはり「あなたのように……」がくり返されるであろうか。妻君の了簡は聞いてみなければわからぬ。

博士になり、教授になり、むなしき名をむなく世間に謳^{うた}わるるがため、その反響が妻君の胸にとどろいて、急に夫の待遇を変えるならばこの細君は夫の知己とは言えぬ。世の中が夫を遇^うする朝夕の模様で、夫の価値を朝夕に変える細君は、夫を評価する上において、世間並みのひとりである。嫁^{よめ}がぬ前、名を知らぬ前、おのれと異なる所がない。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁^{よめ}ぐ前と嫁^{よめ}ぐ後とに変わりがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。世界はこの細君らしからぬ細君をもつて充滿している。道也は自分の妻をやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容れられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟^きつたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充滿していると言つ

た。かかる細君をもつて充滿しておりながら、皆円満にくらしている。順境にある者が細君の心事をここまでに解剖する必要がない。皮膚病にかかればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣もないのにきたないものを顕微鏡でながめるのは、ことなきに苦しんで肥^ふ柄杓^{びょうしやく}を振り回すと一般である。ただこの順境が一転して逆落^{さかお}としに運命の淵^{ふち}へころがり込むとき、いかな夫婦の間にも氣まずいことが起こる。親子の羈絆^{きはん}もぼつりと切れる。美しいのは血の上を薄くおおう皮のことであつたと氣がつく。道也はどこまで氣がついたか知らぬ。

道也の三たび去つたのは、好んでみずから窮地に陥るためではない。罪もない妻に苦勞を掛けるためではない。おさらない。世間がおのれを容れぬからしかたがないのである。世が容れぬならなぜこちらから世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那に道也はきれいに消滅してしまふからである。道也は人格において流俗より高いと自信している。流俗より高ければ高いほど、低いものの手を引いて、高いほうへ導いてやるのが責任である。高いと知りながらも低き

につくのは、みずから多年の教育を受けながら、この教育の結果がもたらした財宝を床下に埋むるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、せつかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒費したわけになる。英語を教え、歴史を教え、あるときは倫理さえ教えたのは、人格の修業に付随してたくわえられた、芸を教えたのである。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえいれればすむ。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿回しが皿をまわして飯を食うのと理論において異なるところはない。学問は綱渡りや皿回しとは違う。芸を覚えるのは末のことである。人間ができあがるのが目的である。大小の区別のつく、軽重の等差を知る、好悪の判然する、善悪の分界をのみ込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬まらざる大丈夫ができあがるのが目的である。

道也はこう考えている。だから芸を售って口を糊するのを耻辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を

離るるのを深く陋劣と心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の本体に根拠地を構えての上の去就であるから、彼自身は内に顧みてやましいところもなければ、意気地がないとも思い付かぬ。頑愚などと言う嘲罵は、掌へ載せて、夏の日の南軒に、虫めがねで検査しても了解ができません。

三たび教師となつて三たび追ひ出された彼は、追ひ出されるたびに博士よりも偉大な手柄を立てたつもりでいる。博士はえらからう、しかし高が芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位をちょうだいするのとたいした変わりはない。道也が追ひ出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるすべてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴しとは道也が迫るるごとに心のうちでくり返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いたことがない。聞いてもわかるまい。

わからねばこそ餓え死にもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻を気の毒と思わぬほどの道

也ではない。ただ妻の歡心を得るためにわが行く道を曲げぬだけが普通の夫と違うのである。世は単に人と呼ぶ。娶れば夫である。交われれば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。去るを単に人と呼ぶ。人と呼んでこと足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道也もない、志士としての道也もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先きざきで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、至る所に職を辞するのは、みずから求むる酔興にほかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出てきた道也は、もう田舎へは行かぬと言いだした。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校にあいそをつかした彼は、あいそをつかした社会状態を矯正するには筆の力によらねばならぬと悟ったのである。今まではいずこの果てで、どんな職業をしようとも、おのれさえ真直であれ

ば曲がったものは芋殻かがらのように向こうで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼を開かしむるため、取捨分別の好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだとおりを六年余り実行して、みごとに失敗したのである。渡る世間に鬼はないと言うから、同情は正しきところ、高きところ、物の理屈のよくわかるところに聚あまると早がてんして、この年月を今度こそ、今度こそと、経験の足らぬわが身に、待ち受けたのは生涯の誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識のあるものでもない。同情とは強きもの、富めるもののにみしたがう影にほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買いかぶって、一足飛びに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へじょうぶな家を建てようとあせるようなものだ。建てかけるが早い、風と言いい雨と言いくせ者がきてこわしてしまふ。地ならしをするか、雨風を退治たいじるかせぬうち

は、落ち着いてこの世に住めぬ。落ち着いて住めぬ世を住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金も勢いもないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。舌の援を藉らねばならぬ。脳みそを圧搾して利他の知恵を絞らねばならぬ。脳みそは涸れる、舌はただれる、筆は何本でも折れる、それでも世の中が言うことを聞かなければそれまでである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけは食わんですむとしても、妻は食わずにしんぼうする気づかいはない。豊かに妻を養わぬ夫は、妻の目から見れば大罪人である。今年の春、田舎から出てきて、芝琴平町の安宿へ着いたとき、道也と妻君の間にはこんな会話が起こった。

「教師をおやめなさるって、これから何をなさるおつもりですか」

「別にこれと言うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかなるだろう」

「そのうちどうかなるだろうって、それじゃまるで雲

をつかむような話じゃありませんか」

「そうさな。あんまりはつきりとしない」

「そうのおんきじゃ困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしょうが、ちつとは私の身にもなつて見てくださいなくっちゃあ……」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならないことにきめたんだよ」

「きめるのはご勝手ですけども、きめたって月給が取れなけりやしかたがないじゃありませんか」

「月給がとれなくつても金がとれれば、よかるう」

「金がとれれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさって、お金がとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着、早々計画が立つものか」

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいるときめたって、きめただけの思案じゃしかたがないじゃあ

りませんか」

「どうもおまえはむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折り合いがわるくっちゃ、おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよっぽど癪癪持ちですわ」

「そうかもしれない。しかしおれの癪癪は……まあ、いいや。どうにか東京で食えるようにするから」

「おあにさんの所へいらしってお頼みなすったら、どうでしょう」

「うん、それもよいがね。兄はいったい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そうなんでもひとりできめておしまいになるから悪いんですわ。昨日もあんなに親切にいろいろ言ってくださったじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くようなことを言った。言ったがね……」

「言ってもいけないんですか」

「いけないないよ。言うのはけっこうだが……あんなり当てにならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、そのうちだんだんわかるさ」

「じゃお友だちのかたにでも願って、あしたからでも運動をなすったらいいでしょう」

「友だちって別に友だちなんかありやしない。同級生はみんな散ってしまった」

「だって毎年年始状をお寄こしになる足立さんなんか東京でりっぱにしていらっしやるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらっしやるから人にきらわれるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりやけっこうじゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行って頼んでみよう。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんなことを言っていらっしやる。あなたはよっぽど強情ね」

「うん、おれはよっぽど強情だよ」

二

午に逼る秋の日は、いただく帽を透して頭がい骨のなかさえ朗らかならしめたかの感がある。公園のロハ台はそのロハ台たるのゆえをもつてことごとくロハ的に占領されてしまった。高柳君は、どこぞあいた所はあるまいかと、さつきからちようど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛けも思うようにわれを迎えないのを発見したとき、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対のほうから同年輩の青年が早足にはいつてきて、やあと声をかけた。

「やあ」と高柳君も同じようなあいさつをした。

「どこへ行つたんだい」と青年が聞く。

「今ぐるぐるめぐって、休もうと思つたが、どこもあいていない。だめだ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。なかなか抜けめはないもんだな」

「天気がいいせいだよ。なるほどずいぶん人が出ているね。——おい、あの孟宗藪を回って噴水のほうへ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知ってる人かね」

「知るものか」

「それじゃなんで見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「なんだかりっぱなものを着ているじゃないか」

「あの色を竹やぶの傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あれは、こう言う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「別に感じない。しかしきれいはいきれいだ」

「ただきれいだけじゃかわいそうだ。君はこれから作家になるんだろう」

「そうさ」

「それじゃもう少し感じが鋭敏でなくっちゃだめだぜ」

「なに、あんなほうは鈍くつてもいいんだ。ほかに鋭敏なところがたくさんあるんだから」

「ハハハハそう自信があればけっこうだ。時に君せっかく会ったものだから、もう一ぺんあるこうじやないか」

「あるくのは、まっぴらだ。これからすぐ電車へ乗って帰らないと午食を食い損なう」

「その午食を奢ろうじやないか」

「うん、また今度にしよう」

「なぜ？ いやかい」

「いやじゃない——いやじゃないが、始終ごちそうにばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあきたまえ」と青年は否応なしに高柳君を公園のまん中の西洋料理屋へ引つ張り込んで、眺望のいい二階へ陣を取る。

注文のくる間、高柳君は青い顔へ両手で突っかい棒をして、さもつかれたと言うふうに往來を見ている。青年はひとりで「ふんだいぶ広いな」「なかなか繁盛すると見える」「なんだ、妙な所へ姿見の広告などを

出して」などと半分口のうちで言うかと思つたら、やがて洋袴のかくしへ手を入れて「や、しまった。たばこを買ってくるのを忘れた」と大きな声を出した。「たばこなら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布の上へほうり出す。

ところへ下女がおあつらえを持ってくる。たばこに火をつける間はなかった。

「これは樽ビールだね。おい君樽ビールの祝杯を一つあげようじやないか」と青年は琥珀色の底からわき上がる泡をぐいと飲む。

「なんの祝杯をあげるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今ごろ卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃を下へおろしてしまった。

「卒業は生涯にたった一度しかないんだから、いつまで祝ってもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。——ねえさん、このフライは何だい。え？ 鮭か。ここん所へ君、このオレンジの露をかけて見たまえ」と青年は人さし指と親指の間からちゅうと黄色い汁を鮭の衣の上へ落とす。庭の面にはらはらと降る時雨のごとく、すぐ油の中へ吸い込まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は装飾についてるのかと思った」

姿見の札幌ビールの広告の本に、大きくなって構えていたふたりの男が、このとき急に大きな破れるような声を出して笑い始めた。高柳君はオレンジをつまんだまま、いやな顔をしてふたりを見る。ふたりはいっこうかまわない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エヘヘヘ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エヘヘヘ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘ってくり出そうと思っていたんだ。え？ ハハハハ。なにそれほどでもない。ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、どうにもこうにもやり切れないの

さ。エヘヘヘヘ、アハハハハハハ」

土鍋の底のような赭い顔が広告の姿見にうつつくずれたり、かたまったり、伸びたり縮んだり、傍若無人に動揺している。高柳君は一種異様ないやな目つきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に言う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジをしぼるのをやめてしまった。

土鍋の底は、やがて勘定を払って、ついでに下女にからかって、二階を買い切ったような大きな声を出して、そうして出て行った。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口一杯はおぼっている。

「あの連中は世の中をなんと思ってるだろう」

「なんとも思うものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「うらやましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものがうらやましくっちゃたいへんだ。そんな考えだから卒業祝いに同意しないんだろう。さあも

う一杯景氣よく飲んだ」

「あの人がうらやましいのじゃないが、ああいうふう
に余裕があるような身分がうらやましい。いくら卒業
したってこう奔命^{ほんめい}に疲れちゃ、少しも卒業のありがた
みはない」

「そうかなあ、僕なんざうれしくってたまらないがな
あ。われわれの生命はこれからだぜ。今からそんな心
細いことをいっちゃあしようがない」

「われわれの生命はこれからだのに、これから先がお
ぼつかないからいやになってしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじゃないか、
大い^{おお}にやるさ。僕もやる気だ、いっしょにやろう。大
いに西洋料理でも食って——そらビステキがきた。こ
れでおしまいだよ。君ビステキの生焼^{なま}けは消化がいい
って言うぜ。こいつはどうかな」と中野君はナイフを
ふるって厚切りの一片を中央から切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」
高柳君はなんにも答えずにむしやむしや赤いビステ
キを食い始めた。いくら赤くてもけっして消化がよさ

そうには思えなかった。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底
せぬうち、先方から中途半ばな慰藉^{いしき}を与えらるるの
は快^{こころよ}くないものだ。わが不平が通じたのか、通じない
のか、ほんとうに氣の毒がるのか、おせじに氣の毒が
るのかわからない。高柳君はビステキの赤さかげんを
ながめながら、相手はなぜこう感情が粗大^{そだい}だろうと思
った。もう少し切り込みたいと言う矢先^{やまき}へ持っ
て、ざああと水をかけるのが中野君の例である。不親
切な人、冷淡な人ならば始めからそれ相應の用意をし
てかかるから、いくら冷たくても驚く氣づかいはな
い。中野君がかような人であったなら、出鼻をはたか
れてもさほどにくやしくはなかったろう。しかし高柳
君の目に映ずる中野輝一^{きいち}は美しい、賢い、よく人情を
解して事理をわきまえた秀才である。この秀才がおり
おりこの癖を出すのは解しにくい。

彼等は同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机
を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴^きい
て、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。